

# 非婚社会の到来

執筆者  
株式会社 三菱総合研究所  
政策・経済研究センター  
シニア・エコノミスト  
白石浩介

## 少子化の原因としての 未婚率の上昇

少子化の原因については、晩婚化や夫婦出生力の低下が指摘されているが、未婚者の増加という要因も大きいと考えられる。わが国では、同棲が結婚生活の準備期間として意識されていないので、婚外子の出生が欧米諸国に比べるとはるかに少なく、そのため未婚率の上昇は出生率の低下に直結する。20～34歳の未婚率(結婚していない人の割合)をみると、男性では68.2%、女性では55.5%(2000年時点)となっている。つまり、若い男性の7割、女性の5割が独身であり、この数値は30年前に比べるといずれも2倍近い水準にまで上昇している。

彼らの多くはいずれ結婚することを考えているだろうが、なかには結婚しない人も出てくる。50歳時点で結婚していない人の割合である生涯未婚率をみていくと、2000年には男性12.57%、女性5.82%にまで上昇している。つまり、中年男性では10人に1人、中年女性では20人に1人が、生涯を通して結婚し

ないのである。男性の生涯未婚率は、1980年には2%強に留まっていたが、その後の20年間で急上昇を遂げた。一方、女性の生涯未婚率は1980年には既に4.45%となっており、近年の上昇傾向はそれほど強くない。是非はともかくとして、女性には「婚期」というものが存在するので、その時期を逃すとなかなか結婚ができない。逆に、女性はそのことがわかっているので、いわゆる相手探しに注力することになり、これが未婚率の抑制要因として働く。かつての女性の未婚率が男性よりも高く、しかし、その後はほぼ一定で推移しているのは、このためであろう。

男性の方は1990年代に未婚率が2倍もの上昇をみせているが、これは同時期における30代男性の未婚率の上昇の延長線上にあると考えることができるだろう。つまり、何らかの事情により結婚に至ることがないまま、初老を迎えてしまう男性が増えているのである。これは新たな問題発生の原因となりうる。結婚は男女が1人ずついなくては成り立たないから、男性の未婚率が上昇していくと、今度はそれ

が女性の未婚率の上昇の引き金となる可能性があるからだ。昨年の流行語になった「負け犬」論争において、シングル女性の増加は、むしろ男性側の問題という意見があったが、それが裏付けられた格好にある。

## 非婚化と 豊かさの関係

わが国の人口が減少するのは、日本が近代社会に移行した明治以降では初めてであるが、それ以前の日本では、じつは3回の人口減少を経験している。縄文末期(紀元前3000年)、平安末期(12世紀)、江戸末期(19世紀初頭)の3回がそれである。減少理由については、気候変動や疫病の流行に加えて、平安末期では古代律令国家の崩壊によるインフラ不足、江戸末期では都市化による未婚者の増加と豊かさ維持のための産児制限があったことが知られている。これらは現代の日本にも共通する現象である。すなわち、長引く経済不況により雇用環境が不安定化し、あるいは国家や地域社

データ  
を  
読み  
解く  
潮流  
俯瞰

「我らは、紛れもなく、有史以来の未曾有の事態に直面している。」(少子化社会対策基本法、前文、平成15年)  
 高齢化社会の到来は、だいぶ前からわかっていたが、  
 少子化の進行は過去10年間の想定外の誤算によるところが大きく、  
 対策が後手に回っている面が否めない。  
 国民の人生設計という私的生活における変化の見極めが求められている。

会の役割が後退することにより、個人や家計が負うべき人生の負担が増している。一方で、空前絶後の経済成長の結果としての豊かさが実現するなかで、その維持のための所得確保がますます重要になっている。出生率の低下には、合理性すら見受けられる。

政府による意識調査によると、独身に留まっている理由としての最も多い回答は、男女とも「適当な相手がない」であるが、「必要性を感じない」、「自由や気楽さを失いたくない」という回答が以前より多くなっている。独身でいる方が、経済的な豊かさを享受できる。ただし、非婚化は必然的に人口の減少と高齢化を招くので、個々の独身者

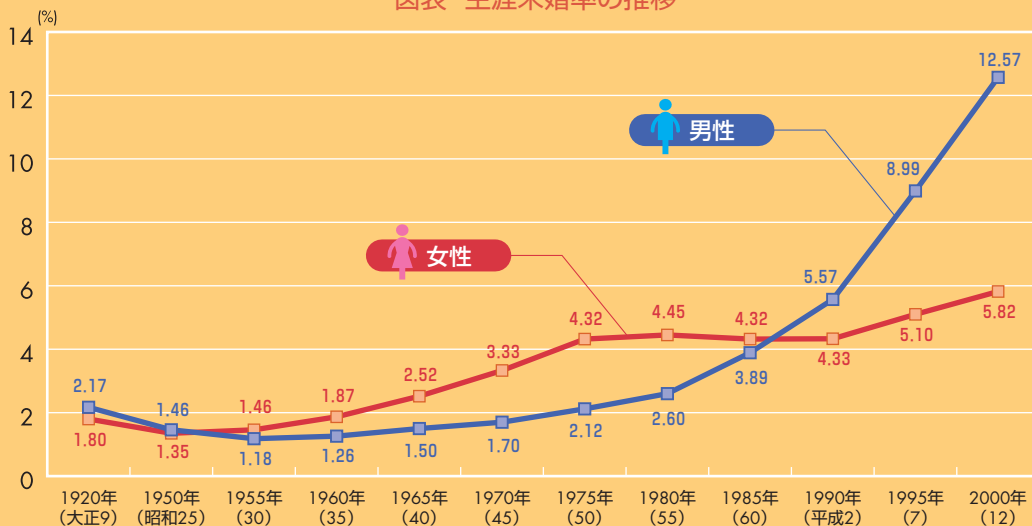
の合理的な行動は、必ずしも日本全体の豊かさにはつながらない。

また、上記の意識調査には、「結婚資金が足りない」という注目すべき回答が見受けられる。これは、結婚を「しない」ではなく、結婚が「できない」という理由である。独身者グループのなかでも二極化が進展していることが窺える。非正社員の増加など、若者をとりまく環境が悪化しており、豊かさの維持というよりは、日本型の豊かさの崩壊が非婚化をもたらしている傾向は、これからますます強まるのであろう。

もはや死語になったが、貧しい男性のことを「匹夫」と形容する漢語がかつて存在した。前近代

の中国は一夫多妻制だったので、奥さんを1人しか持てない男性は、貧しいから「匹夫」なのである。実際には生涯を通して、独身に留まる隷属農民が多かったと言われている。一方、日本では江戸時代には、家族を単位とする農業生産が定着し、これが生産力の上昇と近代社会への移行をスムーズにさせた。このように社会における家族形態の相違は、その後の歴史すら変えてしまう。そもそも結婚しない非婚化と、夫婦が持つ子供の数が減少する少子化との違いは意外と大きく、非婚化には日本の文明を左右するほどのインパクトがあるのではないか。

図表 生涯未婚率の推移



データ：国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」

注：総務省統計局「国際調査」より算出。生涯未婚率は、45～49歳と50～54歳未婚率の平均値であり、50歳時の未婚率を示す。

資料：内閣府「平成16年版 少子化社会白書」より転載